

稲春プラザ

私は、平成&令和の“大黒屋光太夫”？

鈴木 勝 (S42 商卒)

この話は、齢60過ぎから72歳まで約10年間、ほぼ隔年で春日部から通勤し(?)、ロシアのサンクト・ペテルブルグ⇒カムチャッカ半島まで通った物語。もちろん、目的はありました。日露交流は双方で毎年20万人弱とわずか。日中や日韓に比べ雲泥の差。「外国人、特に日本人が、観光で、ビジネスで、留学で、ロシアに行きたい!」。この声に応えるべく“麗しの国・ロシア”作りの「産官学・国際観光講座」の“お雇い外国人”講師でした。サンクト・ペテルブルグ(講座3日間 ×@6時間)から始め、最終的には約20都市で開催しました。

ある日、『おろしや国酔夢譚』の映画を再度見て、改めて大黒屋光太夫に注目。井上靖の同名小説、吉村昭の『大黒屋光太夫』、桂川甫周の『北槎聞略』を読み、行程といい、訪問期間といい、厳寒の冬季移動といい(注:光太夫は馬橈を多用。私の場合は講義は受講生が参加しやすいオフ期の冬季開催)、私の行動に酷似しビックリ。まるで“平成&令和の大黒屋光太夫”だ!彼は江戸時代の伊勢出身の回船船頭。1782年、嵐で江戸への回船が漂流しアリューシャン列島に漂着。サンクト・ペテルブルクで女帝エカテリーナ2世に帰国を願い出るまで大陸を往復、9年半後に根室に帰着。[伊勢・白子の浜⇒アリューシャン列島⇒カムチャッカ⇒ヤクーツク⇒イルクーツク⇒ニジニーノヴゴロド⇒モスクワ⇒サンクト・ペテルブルグ⇒イルクーツク⇒根室]。彼はカムチャッカ半島に渡りサンクト・ペテルブルクまで西へ西へと。

これに反し、“平成&令和の光太夫”はサンクト・ペテルブルグから約10年間、東に進み2018年にカムチャッカ半島に到着。光太夫ルートに重なります。私の全訪問の中で、[アルハンゲルスク(北極海)、オレンブルグ(カザフスタン国境)、サラトフ(ボルガ河)、ユジノサハリンスク(サハリン)]は横道ですが、次の都市に光太夫の足跡があるかもしれません。[ゴルノアルタイスク、ウランウデ、ハバロフスク、ウラジオストク]。また、「伊勢・白子の浜」は2024年に墓参に行き、“21世紀の光太夫”の旅は終了しました。

“麗しの国・ロシア”作りはコロナ禍で中断、2022年のウクライナ侵攻で中止が決定的で誠に残念です。2020年には成田〜ウラジオストクにJALやANAが毎日、就航予定で、ホテルオークラもオープン間近でした。今後は“22世紀の大黒屋光太夫”にお任せしたい。

ロシア講義風景 (サンクトペテルブルグ2007)



鈴木 勝さんのプロフィール

S42年商学部卒、日本交通公社(現JTB)に33年間勤務し、その後、大阪観光大学、桜美林大学の教員を務める。現在、釧路湿原美術館(NPO)理事

QRコードを開くと鈴木さんの講演風景が見られます。3分ほどのYouTubeです。



「ロシア観光振興・講義」行脚

<平成・大黒屋光太夫の動き>



(資料)日本政府観光局(JNTO)地図に記入



(資料)「おろしや国酔夢譚」(井上靖・文春文庫)